

日本語の再発見 表音文字の正体

ここで、表音文字の正体を徹底的に明らかにして置かうと思ふ。

西欧の言語学者や文字学者は、スメール文字やエジプト文字、漢字など、本当の文字を“表意文字”と名付け、自分たちの「仮借に過ぎない」ローマ字を“表音文字”と称し、「表意対表音」といふ形で文字を扱って来た。然し、これは自分たちの使っているローマ字を美化しようとするための謀略である。

私が「謀略だ」と言ふのには、それだけの理由がある。すでに度々述べてあるやうに、“文字”は「発生するや否や消滅してしまふ“言葉”を保存するために創作」したものである。だから、創作された文字は、(スメール文字でもエジプト文字でも漢字でも)皆、一つ一つ言葉に対応して作られてゐる。言葉を一語一語直接に表したものであるから、“表語文字”と称すべきであって、“表意文字”と呼ぶのは明らかに不当である。

“表語文字”は、言葉の意味だけでなく、その発音をも当然の事ながら表してゐる文字なのである。つまり、表意兼表音文字なのである。それなのにこれを“表意文字”と呼ぶことは、この文字に表意だけ出来て表音は出来ない文字だといふ誤解を生み易い。西欧の学者たちはそ

こをねらって“表意文字”と命名したのである。

自分たちの使ふローマ字は、音しか表せない文字であるから、これは“表音文字”としか言ひやうがない。そこで、表語文字を“表意文字”と呼べば、「片や表音の表音文字、片や表意の表意文字」といふことで、対等に並ぶことが出来る。これはどうしても謀略であるとしか言ひやうがない。

およそ、自分に關はるものはすべて美化したいのは人情であるが、それは特に西欧の人々に強い。日本人はむしろ謙遜し卑下するのが普通であるから、かういふ西欧の考へ方は理解し難いかも知れない。

例へば、フランス人は、フランス語ほど優美な言葉は世界のどこにも無いと自負してゐる。アナトール・フランスは、「フランス語の“笑ふ”といふ言葉は、よその国の“笑ふ”といふ言葉とは違ふ」と言つて母国語を礼賛してゐる。

また、ドイツ人はドイツ人で、「ドイツ語ほど明快で、論理的に明晰な表現の出来る言葉は他に無い」と言つてゐるし、ロシヤ人は「ロシヤ語ほど文学的に豊かな表現力を有つた言葉は他に無い」と言つてゐる。

また、イタリア人は「イタリア語ほど音楽的で優美な発音を有つた言葉は他に無い」と言つて誇り、イギリス人は「世界的に共通語としての実績を有つ英語」について限りない誇りを懐いてゐるのである。

日本語の再発見

かういふ事が平気で言へる彼らだから、自分たちの使っているローマ字が、「表語文字の発音だけを借りた欠陥文字」であるとは、認めたくないに決っている。いや、世界一優れた文字だと誇りたいに決っている。そこで、欠陥文字であるローマ字を「世界一の文字」に仕立てるために大変な努力を払っているのであるが、その辛苦のあとをお見せしたいと思ふ。